

第 58 回名古屋春栄会  
演目のあらまし

令和元年 7 月 28 日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

四海波(しかいなみ)〔高砂(たかさご)〕	1
芦刈(あしかり)	2
東北(とうぼく)	3
盛久(もりひさ)	4
安宅(あたか)	5
六浦(むつら)	6
経政(つねまさ)	7
采女(うねめ)	8
江口(えぐち)	9
女郎花(おみなめし)	10
誓願寺(せいがんじ)	11
角田川(すみだがわ)	12
融(とおる)	13
岩船(いわふね)	14
淡路(あわじ)	15
〔能のミ二知識	16〕

このリーフレットは、第58回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 四海波（しかいなみ）〔高砂（たかさご）〕

【分類】 初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（四海波の部分…下線部の話の一つです）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（四海波の部分の抜粋）

四海波静かにて、國も治まる時つ風。枝をならさぬ御代なれや。あいに相生の、松こそ目出たかりけれ。げにやあおぎても、こともおろかやかかる世に。すめる民とて豊かなる。君の恵みは有難や。君の恵みはありがたや。

## 芦刈（あしかり）

---

【分類】 四番目物（男物狂物） \*男舞  
【作者】 世阿弥（古能を改作）  
【主人公】 シテ：日下左衛門（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

津の国の日下の里（大阪府東大阪市）の住人の左衛門は貧乏のすえ、心ならずも妻を離縁します。妻は、京の都に上って、さる高貴な人の若君の乳母となり、生活も安定したので、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねます。在所の者に聞いても、以前のところにはいないということで、途方にくれますが、しばらくの間、付近に逗留して夫を捜すことにします。一方、左衛門は落ちぶれて、芦を刈りそれを売り歩く男になっています。しかし、彼はその身の不遇を嘆くでも怨むでもなく、すべてを運命と割り切って、時に興じ物に戯れ、自分の生業に満足しています。そして、ある日妻の一行とも知らず、面白く囃しながら芦を売り、問われるままに、昔、仁徳天皇の皇居があった御津の浜の由来を語り、笠尽しの舞をまて見せます。いよいよ買ってもらった芦を渡す段になって、思いがけず妻の姿を見つけ、さすがに今の身の上を恥じて、近くの小屋に身を隠します。後を追おうとする従者をとどめ、妻は自分で夫に近づき、やさしく呼びかけます。夫婦は和歌を詠み交わして、心もうちとけ、再びめでたく結ばれます。装束も改めた左衛門は従者のすすめで、さわやかに祝儀の舞をまい、夫婦うち揃って京の都へ帰ってゆきます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

浮世忘るる難波江の。浮世忘るる難波江の。芦の若葉を越ゆる白浪も。月も残り。  
花もさかりに津の国の。こやの住まいの冬ごもり。今は春べの都の空に。誘われわたるや大伴の。御津の浦わの見つつを契りに。帰る道こそ嬉しけれ。

## 東北（とうぼく）

---

【分類】 三番目物（鬘物） \*序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすから読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の 音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

袖ふれて舞人の。かえすは小忌衣。春鶯囀という楽は。これ春の鶯。鶯宿梅はいかにや。これ鶯のやどりなり。好文木はさていかに。これ文を好む木なるべし。唐のみかどの御時は国に。文学さかんなれば。花の色もますます匂い常よりみちみち。梅風よもに薫ずなる。これまでなりや花は根に。鳥は古巢に帰るとて。方丈の灯を。火宅とや猶人はみん。こここそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室に入ると見えし。夢はさめにけり。見えつる夢はさめにけり。

## 盛久（もりひさ）

---

【分類】四番目物（雑能＝現在物） \*男舞

【作者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：主馬判官盛久（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

平家の侍、主馬判官盛久は、捕われの身を、鎌倉へ護送されることとなります。その出発に際して、盛久は警固の武士、土屋某に頼んで、日頃信仰する東山の清水観音に輿をまわしてもらい、最後の祈願をします。やがて花の都に名残を惜しみつつ、東海道を鎌倉へと下ります。鎌倉に着き、旅宿に幽閉された盛久は、流転の身を振り返り、早く斬られたいと述懐します。そこへ土屋が訪れ、処刑の時が迫った由を告げたので、盛久は心静かに法華経を読誦します。夜明け方、ふと仮寝をした盛久は、夢の中で観音のお告げを受けます。かくて夜が明け、盛久は土屋に伴われて、刑場である由比ヶ浜に急ぎます。太刀取りが、彼の後ろから斬りつけようとする、盛久の手にした経巻から発する光で目が眩み、思わず取り落とした太刀は、二つに折れてしまいます。この知らせを受けた頼朝は、盛久を呼び寄せます。盛久は衣服を改めて、御前に参上し、尋ねに応じて、彼が見た清水あたりから来た老夫婦が、盛久の日頃の信心を嘉して、「われ汝が命に代るべし」と仰せられたという霊夢を物語ります。頼朝は、自分の見た夢と全く一致するので奇特に思い、盛久の命を助け、盃を与えます。そして盛久は所望にまかせて、御代を壽ぎ、我が身の喜びを添えて舞をまい、御前を退出します。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

有難し有難し得難きは時。去りがたきは貴命なり。盛久かかる時節に会うこと。世もって隠れあるべからず。治まりなびく時なれや。一天四海の内のみか。人の国まで日の本の。唐土が原もこの所。

<男舞>

酒宴なかばの春の興。酒宴なかばの春の興。くもらぬ日影のどかにて。君を祝う千秋の鶴が岡の。松の葉の塵。失せずして正木の葛。長居は恐れあり。長居は恐れありと。まかり申しつかまつり。退出しける盛久が。心の内ぞゆゆしき。心の内ぞゆゆしき。

## 安宅（あたか）

---

【分類】 四番目物（雑能＝現在物） \*男舞

【作者】 観世小次郎信光

【主人公】 シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

平家討伐に最も勲功のあった源義経も、戦がすむと兄頼朝から追われる身となります。偽山伏に姿をかえ、奥州に落ちのびようとする義経主従を、頼朝は国々に新しく関所を設けて止めようとしています。加賀国（石川県）安宅には、富樫某が下人と共に関を守っています。義経一行は、都を出てやっと安宅に着きますが、関のあることを聞いて、強力〔ごうりき〕に様子を見にやらせると、なかなか用心がきびしいので、義経を強力〔ごうりき〕に仕立て、南都東大寺建立勸進のための一行だといって通ろうとします。しかし関守が全員斬殺するというので、それでは仕方がない討たれようと、殊勝そうに最後の勤行をしますが、山伏を殺せば天罰が当たると威嚇するので、関守は少しひるみ、勸進帳を読めといいます。弁慶がもちあわせた巻物を勸進帳といつわって読み上げ、一度は通過を許されますが、義経の姿を見とがめられ追求を受けます。しかし、弁慶の機転と豪勇で首尾よく、その場を逃れることができます。関を通過して、ほっと一息ついているところへ、先刻の関守が後難を恐れ、非礼を詫びるため酒をもって後を追ひ、一同にふるまいます。酒宴になっても弁慶は油断せず、力強い舞を見せ、関守に暇を告げ、一行に先を急がせます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

鳴るは滝の水。日は照るとも絶えずとうたり絶えずとうたりとくたくて立てや。手束弓の。心許すな関守の人人。暇申してさらばよとて。笈をおっ取り肩にうちかけ。虎の尾を踏み。毒蛇の口を逃れたる心ちして。陸奥の国へぞ。くだりける。

## 六浦（むつら）

---

【分 類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作 者】金春禅竹（?）

【主人公】前シテ：里女（面：小面）、後シテ：楓の精（面：小面）

【あらすじ】（今回の仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

都の僧が東国行脚の途中、相模国（神奈川県）六浦の称名寺に立ち寄ると、折りしも山々の木々が今を盛りと紅葉しているのに、この寺の一本の楓だけが少しも紅葉していないので、不審を思ってみていると、ひとりの里の女が現れます。女は、昔、鎌倉中納言為相卿がこの寺に来た時、この木だけが山々に先立って紅葉しているのを見て、和歌を一首詠じたところ、この木は喜び、功成り名を遂げた上は身を退くのが天の道と信じて、それ以来常緑樹のようになったのです、実は私は楓の精であると言って秋草の中に消え失せます。

<中入>

その夜、僧がここで過ごしていると、楓の精が現れて、草木も成仏できる仏徳を称えて舞をまいますが、明け方になると影の如く消えてしまいました。

【詞章】（今回の仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

月日経て。移れば変わる眺めかな。桜は散りし庭の面に。咲きつづく卯の花の垣根や雪にまごうらん。時移り夏暮れ秋もなかばになりぬれば。空定なきむら時雨。昨日うすきもみじ葉も。露時雨もる山は。下葉残らぬ色とかや。さるにても。東の奥の山里に。あからさまなる都人の。あわれも深き言の葉の。露の情に引かれつつ。姿をまみえかずかずに。言葉をかわす知遇の縁。深きみ法を授けつつ。仏果を得しめ。たまえや。

## 経政（つねまさ）

---

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

いや雨にてはなかりけり。あれ御覽ぜよ。雲の端の月に並の岡の松の。葉風は吹き落ちて。村雨のごとくに音ずれたり。面白やおりからなりけり。大絃はそうそうとして。村雨のごとしきて。小絃はせっせっとして。ささめ言に異ならず。第一第二の絃は。さくさくとして秋の風。松を払って疎韻に落つ。第三第四の絃は。れいれいとして夜の鶴の。子を思つて籠の内に鳴く。鶏も心して。夜遊の別れとどめよ。一声の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれにめでて。桐竹に飛びくんだりて。翼を連らねて舞い遊べば。律呂の声声に。心声に発す。声文をなす事も。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊や。あら面白の。夜遊や。

## 采女（うねめ）

---

【分 類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・小面）、後シテ：采女の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国をまわって歩いている旅の僧が、京都の寺々もほぼ見終わったので奈良へやって来ます。そして、春日の里につき、春日明神へ参詣します。すると、そこへ一人の女性がやって来て、木を植えます。僧が不審に思って言葉をかけると、その女性は、春日の神の由来、木を植えることの原因などを、詳しく話します。続いてその女性は、僧を猿沢の池に案内し、帝の寵愛を失った采女が、ここに入水したという物語をし、実は自分はその采女の幽霊だと告げて、池の底に姿を消します。

<中入>

僧は不思議な思いで、ちょうどやって来た土地の人に、もう一度春日の社の縁起と采女の死のことを尋ねます。里人も僧の会ったという女性の話を聞き、それは采女の亡霊だから、弔ってやるように勧めます。僧が回向をしていると、采女の亡霊が現れ、弔いを受けたことを喜び、仏教説話にあるように自分も変成男子となり、成仏して極楽に生れたことを述べます。続いて采女というものが、いかに人の心を和ませるのに役立ったかを語り、宮廷の酒宴の場で興を添えたときのことを思い起こして、舞を舞います。そして、御代を祝福しつつ、再び池の中へ消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

葛城の王。勅に従い陸奥の。忍ぶもぢぢり誰もみな。こともおろそかなりとて。設けなんどしたりけれど。なおしもなどやらん。王の心解けざりしに。采女なりける女の。かわらけ取りし言の葉の。露の情に心解け歡感もって甚し。されば浅香山。影さえ見ゆる山の井の。浅くは人を思うかの。心の花開け。風もおさまり。雲静かに。安全をなすとかや。しかれば采女の戯れの。色音に移る花鳥の。とぶさに及ぶ雲の袖。影もめぐるや杯の。御遊のみ酒のおりおりは采女の衣の色添えて。大宮人の小忌衣。桜をかざす朝より。今日もくれはどり。声のあやをなす舞歌の曲。拍子を揃え。袂をひるがえして。遊楽回雪たる。采女の衣ぞ。妙なる。

## 江口（えぐち）

---

【分 類】三番目物（鬘物） \*序ノ舞

【作 者】観阿弥

【主人公】前シテ：里の女（面：小面）、後シテ：江口の君（面：小面）

【あらすじ】（連吟 [クセ] の部分…下線部）

諸国一見の旅の僧が、津の国（大阪府）天王寺へ参ろうとして、その途中、江口の里に着いたので、土地の人に尋ねて、江口の君の旧跡を教わります。そこで昔、西行法師がここで宿を求めたが、遊女に断られ、「世の中を いとふまでこそ かたからめ 仮の宿りを 惜しむ者かな」という歌を詠んだことを思い出し、それを口ずさみます。すると、いずこからともなく一人の女が現れ、それは断ったのではなく、出家の身を思って遠慮したのだと説明し、あなたも僧侶の身として、そうした俗世の事に心を留めない方が良いと言います。僧が女の名を尋ねると、江口の君の幽霊であると明かして、たそがれの川辺に消え失せます。

<中入>

旅僧は、先程の江口の里の男から、この里の遊女が、普賢菩薩の化現であったという話を聞き、奇特の思いに、夜もすがら読経していると、月澄みわたる川面に、江口の君や遊女たちが舟遊びする光景が見えてきます。そして、彼女たちはその身の境涯を語り、そのはかなさを嘆くと共に、この世の無常を述べます。そしてさらに舞を舞い、この世への執着を捨てれば迷いは生じないと仏教の奥義を説き、やがてその姿は普賢菩薩と変じ、舟が白象となると、それに乗って、西の空へと消えてゆきます。

【詞章】（連吟 [クセ] の部分の抜粋）

紅花の春のあした。紅錦繡の山。装おいをなすと見えしも。夕べの風に誘われ黄葉の秋の夕べ。黄纈纈の林。色を含むといえども。朝の霜にうつろう。松風羅月に。言葉を交わす賓客も。去つて来たることもなく。翠帳紅閨に。枕を並べし妹背も。いつの間にかは隔つらん。およそ心なき草木。情ある人倫。いずれ衰れをのがるべき。かくは思い知りながら。ある時は色に染み。貪着の思い浅さからず。またある時は声を聞き。愛執の心いと深き。心に思い口に言う。妄染の縁となるものを。げにや皆人は。六塵の境に迷い。六根の罪を作ることも。見る事聞く事に。迷う心なるべし。

## 女郎花（おみなめし）

【分類】四番目物（執心物） ＊カケリ

【作者】亀阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：小野頼風の霊（面・中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

九州松浦瀧の僧が都見物を思い立ち上洛して来ます。その途中、故郷の宇佐八幡と御一体である石清水八幡宮に参詣しようと、男山の麓まで来かかります。折しも秋なので、野辺には女郎花が美しく咲き乱れています。男山の女郎花は古歌にも詠まれたほどの由緒のある名草なので、一本手折って土産にしようと立ち寄りますと、一人の老人が現れて、それを止めます。二人は花を折ることの可否を、たがいに古歌を引いて論じ合います。僧があきらめて立ち去ろうとすると、老人はいろいろ古歌を知っている風流な人だとほめ、八幡宮の社前に案内し、さらに麓の男塚・女塚にも連れて行って、これは小野頼風夫婦の墓であると教え、今は誰も弔う人がないと嘆き、自分がその頼風である、とほのめかして消え失せます。

<中入>

旅の僧は土地の人から、詳しく頼風夫婦の話聞き、その夜はその場所で読経をすることにします。僧が回向をしていると、塚から頼風夫婦の亡霊が現れます。女はもと都の者で、頼風と契りましたが、その心を疑って放生川に身を投げます。女の亡骸を土中に埋めると、その塚から女郎花が咲き出します。頼風はそれを哀れんで、同じく川に身を投げました。その亡骸を埋めたところが男塚であると物語り、今はともに邪淫の悪鬼に責められている、と僧に成仏を願います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

頼風心に思うよう。さてはわが妻の。女郎花になりけるよと。なお花色もなつかしく草の袂もわが袖も。露ふれそめて立ち寄れば。この花怨みたるけしきにて。夫の寄ればなびき退きまたち退けば。もとのごとし。ここによって貫之も。男山の昔を思って女郎花のひと時を。くねると書きし水茎の。あとの世までもなつかしや。頼風その時に。かのあわれさを思ひとり。むざんやなわれ故に。よしなき水の泡と消えて。徒らなる身となるも。ひとえにわが料ぞかし。しかじ憂き世に住まぬまでぞ。同じ道にならんとて。つずいてこの川に身を投げて。ともに土中にこめしより。女塚に対してまた男山と申すなり。その塚はこれ主はわれ。幻ながら来たりたり。跡弔むらいてたびたまえ。跡弔むらいてたびたまえ。あら閻浮。恋しや。

<カケリ>

邪淫の悪鬼は身を責めて。邪淫の悪鬼は身を責めて。その念力の。道もさがしき剣の山の。上に恋しき人は見えたり嬉しやとて。ゆき登れば。剣は身を通し。磐石は骨を砕く。こはそもいかにに恐ろしや。剣の枝のたわむまでいかなる罪の。

なれる果ぞや. よしなかりける。花のひと時を。くねるも夢ぞ女郎花。露の台や花の縁に。浮かめてたびたまえ。罪を浮かめて。たびたまえ。

## 誓願寺（せいがんじ）

【分類】三番目物（鬘物） \*序ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ばります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に來迎される模様などを表す莊嚴優美な舞を舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

笙歌はるかに聞こゆ孤雲の上なれや。聖衆來迎す落日の前とかや。昔在靈前の。御名は法華一仏。今西方の弥陀如来。慈眼視衆生現われて。娑婆示現觀世音。三世利益同一體。有難や。われらがための悲願なり。若我成仏の。光を受くる世の人の。わが力には行きがたき。御法の御舟の水馴棹。さきでも渡るかの岸に。至り至りて楽しみを。極むる国の道なれや。十悪万邪の。迷いの雲も空晴れ。真如の月の西方も。ここを去ること遠からず。唯心の浄土とはこの。誓願寺を。拝むなり。

## 角田川（すみだがわ）

---

【分 類】四番目物（雑能＝狂女物） ＊カケリ

【主人公】シテ：狂女＝梅若丸の母（面：曲見）

【作 者】観世十郎元雅

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

春の武蔵野、隅田川のほとりで大念仏を催すことになり、渡守がその参加者を募っています。そこへ一人の女物狂が物につかれたようにやって来ます。女は京の都の北白川の者で、子どもを人買いにさらわれ、そのため狂気になって我が子の行方を尋ね歩き、はるばる東国まで来たのです。そして渡舟に乗ろうとしますが、渡守はなかなか乗せようとしません。すると女は、かもめを見つけ、「名にしおば いざ言問はむ 都鳥 わが思ふ人は ありやなしやと」という在原業平の和歌を思い出し、業平は妻を、自分は我が子を捜しているが、その思いは同じだと嘆きます。渡守は哀れになり、舟に乗せてやり、舟を漕ぎながら川向こうの大念仏は、一年前、人商人に連れられた子どもが病死したのを人々が不憫に思い回向しているのだと語ります。その子こそ、尋ねる我が子梅若丸と知り、女は泣き伏します。同情した渡守は、女をその塚に案内します。母の念仏に、我が子の声が聞こえ、その姿が幻のように現れますが、その幻は夜明けと共に消え失せ、後には草の生い茂った塚があるのみでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

われもまた。いざこと問わん都鳥。いざこと問わん都鳥。わが思い子は東路に。ありやなしやと。問えども問えども答えぬはうたて都鳥。鄙の鳥とやいいてまし。げにや舟競う。堀江の川の水際に。来居つつ鳴くは都鳥。それは難波江これはまた。隅田川の東まで。思えば限りなく。遠くも来ぬるものかな。さりとは渡守。舟こぞりて狭くとも。乗せさせたまえ渡守。さりとは乗せて。たまえや。

## 融（とおる）

---

【分 類】五番目物（切能＝貴人物） \*早舞

【作 者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやってくる。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

忘れて年を経しものを。まった古に帰る波の。満つ塩竈の名にしおう。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わの遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈に心をうつし。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝枝に。光を花と。散らす粧い。ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の杯。うけたりうけたり。遊舞のそで。

<早舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくみならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くと飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

## 岩船 (いわふね)

---

【分類】 初番目物 (脇能＝荒神物)

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：童子 (面・童子)、後シテ：龍神 (面・黒髭 (泥小飛出))

【あらすじ】 (仕舞の部分…下線部)

時の帝が摂津国 (大阪府) 住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思っ問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た<sup>と</sup>告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っただけ<sup>れば</sup>ありがたいと言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだと言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】 (仕舞の部分の抜粋)

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波。えめぐりめぐりて住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮に引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

## 淡路（あわじ）

---

【分類】 初番目物（脇能＝男神物） \*急ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：伊邪那岐神（面・大天神）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

今上の帝に仕える大臣と従者が住吉・玉島の社へ参詣した後、淡路の国に古跡見物に立ち寄ります。淡路国ではちょうど、苗代づくりの季節なので、水田の取水口にいくつもの御幣が立ててある。農作業に御幣とは、さてはここは神田かと、大臣が作業をしている老人に理由を問うと、老人は「谷水を五十串立て、苗代小田の田ねまきにけり」という和歌を口にし、二の宮の神田である旨を伝えます。そこで大臣は「ここが二の宮なら、一の宮はゆず葉権現か」と再び問います。老人はそれに対して、大臣の考え違いを指摘し、二の宮とは神社の社格を表わすのではなく、イザナギ・イザナミの二神を一緒に祀っているために付いた名称でだと説明します。そして、イザナギには万物の種を蒔く意味があり、イザナミにはその収穫を収めるという意味があるので、当地は今日でも、豊かな実りに恵まれた土地となっているのだといいます。そして、イザナギとイザナミによる国生み神話を物語ります。話が終わると、老人は「神代の天の浮橋の様子を見せよう」と大臣たちに告げ、「烏羽玉のわが黒髪も乱れずに、結び定めよ小夜の手枕」という和歌を残して、天上に消えてしまいます。

<中入>

その夜、春の月夜を眺めている大臣たちの耳に神楽の音が聞こえ、目の前に光がさしたかと思うと、伊邪那岐（イザナギ）が現われます。そして、天神七代地神五代を経て今の御世に至るまで「風は吹けども地は山は動かず」と、天下泰平を喜び、さまざまな神遊びを繰り返した後、わが国が幾久しく栄えることを約束するのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

ふり下げし鉾の滴り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし。ここぞ浮橋の下ならん。げにこの島の有様。東西は海まんまんとして。南北に雲峰をつらね。宮殿にかかる浮き橋を。立ち渡り舞う雲の袖。さすは御鉾の手風なり引くは。潮の時つ風。治まるは波の芦原の。国富み民も豊に。万歳を謡う春の声。千秋の秋津洲。治まる国ぞ久しき。治まる国ぞ久しき。

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かつら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方[はやしかた]**…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して10~20分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。  
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>